

おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）
東京で大学・研究室生活を経てUターン
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる
心理学・新潟学等講師、経営学修士（MBA）
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）
「おもしろ えちご塾」（恒文社）等

「新潟のオノマトペ」

新潟のことばには、特色ある擬音語・擬態語が多いようです。この擬音語・擬態語を総称して「オノマトペ」と呼びますが、新潟独自あるいは新潟らしい響きのするオノマトペをみていきましょう。

「のったらくったらした前置きはこのへんにして、ちゃっちゃと本題に入らんかね？」とのお声が聞こえてきますが、すったらもったら、気をもたせて、いってかこってか話を進めないのが、悪い癖。だってもかっても、「てもさってもそじゃないか？」と十日町小唄にもあるように、とにもかくにも、ぐつつらこつつら新潟には、特色あるオノマトペがあるのです。

筆者のとっつけくっつけ調査（気が向いたときに取ってつけたように）では、県内には心身の状態や不調を表現する『身体オノマトペ』がいくつかあって、それぞれいっぺことあると思われまます。たとえば、調子がよろしくなく（塩梅悪く）いってか寝床から離れられないことを、「しっくらもつくらしていってこってか起きらんね」と表現します。この場合「のつーつとしてどうやんだね？部屋もしじらほじららし」といわれてやっきやきしてしまします。

やっこすつとこ起きてみたけど、喉がいらつらつしてけっくらけっくら、気分ももやもや。おまけに、寝違えたのか体の節々もえつらえつら、むっくら起きのせいで結局ばつたらくつたらして一日を過ごしましたとき、とごしゃらごしゃら並べ立てているだけで、目がちゃかちゃかしてきます。

気分がきそきそ落ち着かなかつたり、気分を害することにいくわしたりしたときは、「このあたりが、ざわっざわつとしたて」と両手を胸で交差してその手の平で腕をなぜなぜします。このざわっざ

わっが背中にくると、悪感を表現する状態のため発熱要注意となり、布団でも衣服でもしっこしこと着込んで寝ていたほうがよいでしょう。

何となく消化不良で調子がよろしくないときは「腹がしっくらもつくら」、心臓が動悸してきたら「胸がどかどか」、さらに症状が進むと「息がふっくらふっくら」して肩で息する難儀い状態ですから、ふったてられた（追い立てられた）ように医療機関にはよはよ、の方がよいでしょう。昔から花粉症のような症状があったのでしょうか、県内には、目と鼻の不調を表すめつちりはつちりという身体表現があります。眼はかゆかゆ涙は出るわ、くしゃみが出るわのアレルギー症状を的確に表しています。

オノマトペはことばが短く、そのものの状態を端的に感覚的に表現しているため、咄嗟の事態、たとえば、病状や気分を相手に伝えるにはもってこいのことばです。寒気がするよりも「ざわっざわする」、喉が痛いよりも「喉がきらつきらつする」の方が、その状態を表していると思います。とはいえ、地域のことば、特にオノマトペのような感覚語は、地域以外の人や意味を知らない人にとってはいってか真意が伝わらなかつたり、また、使う本人はこれを方言とっていなかつたりすることから、会話がげつらばたらして誤解を生じることがあることも事実です。だからこそ、特色ある「新潟のオノマトペ」を再考し、県内にあばらとばらある味わい深い身体表現をちょこまか採集し、発信していきたいと思ひます。

